

ルース・ベネディクトによる「アポロ型」と 「ディオニソス型」の概念についての一考察

Revisiting Benedict's Definition of Apollonian and Dionysian Types

福井七子 菊地敦子
Nanako Fukui Atsuko Kikuchi

“Psychological Types in the Culture of the Southwest” was the paper where Benedict started to develop the concept of ‘Dionysian and Apollonian types’. The Dionysian’s desire “in personal experience or in ritual is to press beyond the ordinary”, where there is “excess” and “frenzy”. The Apollonian “distrusts” this and “keeps the middle of the road, stays within the known map, maintains his control over all disruptive states”.

Applying this to cultural types, Benedict finds that although the Southwest Pueblo Indians share with its surrounding tribes common cultural acts such as fasting, dancing and the taking of one’s own life (suicide), the Southwest Pueblo Indians pursue these activities with an Apollonian approach whilst the surrounding tribes take a Dionysian approach. This observation eventually leads Benedict towards cultural relativism, which is the view that each culture has its own values.

In this article, the authors present the first Japanese translation of the above paper and suggest in the annotation that the above insights by Benedict stems from her own childhood struggle with the two worlds that she was torn between: the emotionally chaotic world of her mother and the calm and peaceful world of her father.

キーワード

ベネディクト、アポロ型、ディオニソス型、文化相対主義

はじめに

この論文はルース・ベネディクトが1928年8月に行われた第23回アメリカ・インディアン研究者国際会議で発表したものをもとに、論集として1930年に出版されたものを翻訳し、それに若干の解説を加えたものである。この会議のなかでベネディクトは初めて「アポロ型」「ディオニソス型」という概念を用いて彼女が主として調査した南西地域におけるネイティブ・アメリカンの心理タイプを分析したものであった。

1927年の夏、ベネディクトはフィールド・ワークを実施した。彼女はそれ以前にも多くのフィールド・ワークを行っていたが、アリゾナ州ピマ族の調査の折、ある特色を発見した。南西地域には多くの部族が居住しており、彼女はズニ・プエブロ族、そしてピマ族に焦点を置いた研究をしていた。その結果、南西部においてピマ族とズニ族は最も近接して居住する部族であるにもかかわらず、お互い非常にかけ離れた文化をもっていることに気付いた。そのためベネディクトはパターンの新しい定義を示そうとした。それは彼女にとって学問上の精神的突破口となったのである。

I

1910年頃より、アメリカ文化人類学の父と呼ばれ、コロンビア大学の教授であったフランツ・ボアズを中心として用いられてきた「パターン」という定義に考えを巡らし、それをさらに発展・展開させるべく、ボアズやボアズの弟子たちは心理学や哲学、そして社会学といった分野の書を広く読んでいた。パターンは行動パターンを意味していたが、そこから発展させ、社会パターンに定義を広げるため様々な研究論文が書かれた。

社会パターンの考えは、伝統という動かない重みによって形成されるパターンを意味した。すなわち、慣習や信念は動かない重力を通して、それ自身に文化の特性を形づくるのが可能な、個別のパターンを形成しながら、世代を通して受け継がれてきた。(カフリー：1993：217)

ベネディクトやエドワード・サピアそしてマーガレット・ミードはこうした考えを広い意味で賛成していた。ミードの薦めもあって心理学者であるコフカ・レヴィンの著書を読んだ。最初にミードが読み、1925年にサピアに貸したものであった。(Anthropologist at Work、以下A. W.とする。A. W. 1) コフカはゲシュタルト理論を英語で書き、英語圏に広く紹介した学者である。サピアはこの書を読み、次のような感想を寄せている。「私の直観的知識が正しいことをあからさまに言う勇気の欠けていたことを私に教えてくれる声」と評し、「行為、芸術、音楽、文化、パーソナリティ、そして他のあらゆるもの」の領域における「その魅惑的で、驚くべき可能性」について思い描かせる書であると述べている。(カフリー：1993：220) 社会の向上にとって文化パターンの将来的利用を模索していた社会学者たちは、心理学的な観点からの研究が広まるにともない、「心的パターン」の定義に向かって進み始めたのである。

1927年の南西部における部族の研究はベネディクトにショックを与えることとなった。そして彼女もパターンの新しい定義に考えを巡らすこととなった。周辺の部族からほとんど影響を受けず、お互いに異なった文化をもっている事実を分析するに際して、彼女は哲学者ニーチェの書『悲劇の誕生』に用いられた語である「アポロ的」と「ディオニソス的」概念を参考にした。しかし、ベネディクトも断っているように「私はニーチェの定義に忠実に従っているわけではない。南西インディアンの問題に直接関係する部分だけ用いたに過ぎない」のである。(A.

W. 2) ベネディクトは「アポロ型」と「ディオニソス型」について次のように説明している。

ディオニソス・タイプは日常の限界を消滅させることにあり、自分の五感による束縛を打ち破り、異なった次元の体験をする瞬間に最も高い価値を求める。ディオニソス・タイプの間人は、個人的な体験、あるいは儀式において自分を超えて新しい心理状態、あるいは過剰な状態を得ることを求めている。彼らが求めている感情に最も近いものが、陶醉状態であり、興奮状態がもたらす光に価値を見い出す。

(A. W. 3)

一方、「アポロ型」とは「……いつも中庸を好み、知っている道しか歩まず、すべての破壊的な心理状態においても冷静さを保つ」人たちを言う。(A. W. 4)

ベネディクトは南西のズニ・プエブロ族はアポロ型であり、たとえ周辺の部族においてディオニソス型の文化が支配的であったとしても、彼らは禁酒を守り、エトスをもち、危険な経験や挑戦的な状況を徹底的に避ける。また性行動も決して乱交はせず、踊りもエクスタシーを得るためではなく、ただ踊りに没頭する。そして拷問を決して行わず、アルコールを作ることはもちろん、飲むこともしないし、麻薬にふけることもない。

ここでベネディクトが力点を置いて書いていることは、ある行為をする、たとえば断食の行為はどの部族にも見られることだが、断食を日常の儀式の一環ととらえることと、断食を通して非日常的な高揚感を得るためのものととらえるかは、区別しなければならないという点である。プエブロ族にとっては断食と高揚感を得ることとは全く結びついてはいない。断食は日常の修行ではあるが、断食をした後、非日常的な力を得られるといった考えはプエブロ族にはない。つまり断食という行為は非日常的であるという点でディオニソス的要素をもっている。しかし、プエブロ族はこの行為をアポロ的にとらえている。

アポロ的かディオニソス的な要素かはその行為が果たす目的の解釈の仕方にあるのである。ベネディクトが終生関心を持っていたテーマ「自殺」について考えてみる。どの部族においても「自殺」は存在する。しかし、自分の命を捨てるということはディオニソス的な行為ではあるが、プエブロ族のように、その行為が儀式的なあだ討ちと考える部族においては、自殺とは考えないのである。自殺という行為はディオニソス的なものであっても、その行動にいたる目的が儀式的なあだ討ちであるなら、アポロ的なのである。

このようにしてベネディクトはニーチェの「アポロ」「ディオニソス」の考えに自らのフィールド・ワークから得た文化に対する分析を加え、彼女なりの文化パターンへと発展させていくのである。いわばこの論文は後の彼女の代表作のひとつとなる『文化の型』の序章ともいえるべきものであった。そしてこうしたアポロ型、ディオニソス型の文化の型についての考えは、後により研ぎ澄まされ、明確な考え方へと発展していくことになる。この段階では萌芽でしか

いが、まさしく文化相対主義へと繋がっていくものと言えよう。

II

2013年9月の『外国語学部紀要』においてルース・ベネディクトの幼い頃の思い出として彼女自身が書いた日記「私の人生の物語……」を紹介した。そのなかに次のような箇所がある。

確かに私はかなり早い時期から二つの世界を持っていました。……その二つのなかの一つは、父の世界で、それは死の世界で、美しいものでした。そしてもう一つは、混乱の世界で、私が嫌悪した爆発するような母の号泣の世界です。私は母を愛していませんでした。母の悲しみのカルトに嫌悪感を抱き、小さいことを気にして心配する母を嫌っていました。しかし、私はいつでももう一つの世界に引きこもることができ、そこには父がいました。……」(2013:6)

その平穏の世界は彼女が3歳の時に病を得て亡くなった父の世界であった。苦悩や怒りからの逃避、それはまさに母の世界から父の世界への逃避を繰り返していた。父の世界は平安と創造の世界であった。彼女は二つの世界を持っており、日常の世界に耐えられなくなると、いつも自由にもう一つの世界に逃げ込むことができた。いうならば彼女は幼い頃よりディオニソス的な喧騒にみちた世界から逃避し、アポロ的な世界に一人浸るということを繰り返してきた。

ベネディクトは論文「南西インディアン文化における心理タイプ」を書いた後、「アブノーマル」についての論文を書く。その論文は「文化人類学とアブノーマル」と題するもので私たちが、アブノーマルだと決めている人たちが、他の文化においては適切に機能することができるというものである。「私たちの文化において不安とされる特性の多くは他の社会ではそれを発達させるために敢えて取り上げるのである。ホモセクシュアリティは絶好の例である。……多くの社会でホモセクシュアルの人たちは無能ではないが、もし彼らに普通になるように強制するとすれば、どんな人も活力を失うであろう。ホモセクシュアリティに名誉ある地位を与えている社会においては、彼らはその地位にふさわしい活動をしている。プラトンの『共和制』はそうしたホモセクシュアリティの解釈を説得力をもって語っている。そこではホモセクシュアリティがよい人生の主要な要素であるときみなされ、当時のギリシア社会では、それが当然のこととしてみなされていた。」(A. W. 5) この論文、すなわち「南西インディアン文化の心理タイプ」と「文化人類学とアブノーマル」は後の彼女の代表作の一つである1934年の*Patterns of Culture*『文化の型』へと繋がっていく。そこには彼女が文化人類学を始めた時から抱いていた目的、彼女なりの大きな野望、それは絶対的な価値観が支配的であった世に掉さし、文化相対的な考えを取り入れながら、そしてそれを科学的に実証することで自分の考えを訴えたと

ルース・ベネディクトによる「アポロ型」と「ディオニソス型」の概念についての一考察（福井・菊地）

いう、計算された道があったように思われてならない。こうした考えは後の彼女の遺作ともなった『菊と刀—日本文化の型』へと一直線につながっていくことは、いわば当然の帰結であったと言えるだろう。そういった意味で、本稿で取り上げた論文「南西インディアンの文化における心理タイプ」は彼女の学問的焦点を定めるきっかけとなった一つの重要な論文といえるものであった。

なお翻訳文にある脚注は、*Anthropologist at Work* の編集者であるマーガレット・ミードが書き入れたもので、その当時のベネディクトの状況を知る上での手がかりとなる貴重なものである。したがって、訳文においても注としてそのまま残すこととした。また本論文は、翻訳はもとより、論文作成においても菊地敦子先生との共同作業によって成されたものであることを書き添えておく。また本文の翻訳に際しては、現在差別的だと考えられている語がある。しかし、ここでは本文の通り訳することにしたことをお断りするものである。

References

- Anthropologist at Work* にみる ルース・ベネディクトの肖像、福井七子・菊地敦子、『外国語学部紀要』第9号（2013年）
- Benedict, Ruth. 1934 *Patterns of Culture*, Boston: Houghton Mifflin Co., 『文化の型』 米山俊直訳、1973年初版、社会思想社、その後講談社学術文庫より改訂され、2008年出版。
- Caffrey, Margaret M. 1989 *Ruth Benedict: Stranger in the Land*. Austin: University of Texas Press.
- M・カフリー 『さまよえる人 ルース・ベネディクト』 福井七子訳、関西大学出版部、1993年。
- Mead, Margaret. *An Anthropologist at Work; Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflin, 1965.
- A. W. 1 : *Anthropologist at Work*, p.207.
- A. W. 2 : *Anthropologist at Work*, p.549.
- A. W. 3 : *Anthropologist at Work*, p.249.
- A. W. 4 : *Anthropologist at Work*, p.240.
- A. W. 5 : *Anthropologist at Work*, pp.267-268.
- http://www.nizm.co.jp/glossary_i/mapinan.html



アメリカの文化圏と部族の分布図

コロンブスがアメリカ大陸にはじめて上陸したとき、北米には約150万人ほどの先住民が生活していた。

南西インディアンの文化における心理タイプ*

プエブロ族の文化は、彼らの周辺の人々の文化と大きく異なる。最も顕著な部分は、生活すべてが儀式化されており、形式的である点である。彼らと生活をともにすると、儀式や踊りの形式的な詳細、儀式的な構成のなかの複雑なからみ、そして個人的な宗教的経験や個人の名誉、個人の利益に対して彼らは何の関心をもたないという重要な点に気づく。すべてを取り込む儀式的な手順を重要視するやり方は、中世のローマ教会がある時期に形式を尊重し、形骸化した儀式のための儀式を重んじたのと同様である。

南西部のインディアン（訳者注）については、以上のことは誰もが認めることであるため、南西部のインディアンの文化の記述はこれ以上言及されることはなかった。しかし、北米インディアンのように非常に儀式化が発達している人々の間では、一つのアメリカ・インディアンの部族を別の集団と区別するためにはこういった記述だけでは不十分である。南西インディアンにとって、平原インディアンの太陽の踊り、平和のパイプの儀式、カルト集団、年齢社会集団は、自分たちの年中踊りや修業ほど生活の中心を構成するものではないが、そのような重要度の違いが、南西インディアンを他の北米インディアンと区別するものではない。彼らの文化的態度や選択は、周辺の地域とは基本的に異なった心理タイプなのである。それは儀式の有無といったことより、より深いところにある。南西インディアンの儀式は、周辺部族のものとは基本的に異なるため、このプエブロ族の基本的心理を理解しない限り、その違いは分かり得るはずもないことである¹⁾。〈この論文についてベネディクトは出版する意志はあったようだが、出版されなかった。：ミードのメモより〉

ニーチェのギリシア悲劇を研究していた時、二つの心理タイプに出合い、そこから得た名前をつけ、それぞれのタイプの説明を書いた。これらの心理タイプは、プエブロ文化の南西地域に見られる。ニーチェはこの二つの心理タイプをそれぞれディオニソス型とアポロ型と呼んだ。二つのタイプに分けることによりニーチェが示したのは、存在の価値を決めるまったく異なった二つのタイプである²⁾。ディオニソス・タイプは、日常の限界を消滅させることにあり、自分の五感による束縛を打ち破り、異なった次元の体験をする瞬間に最も高い価値を求める。ディオニソス・タイプの間人は、個人的な体験、あるいは儀式において自分を超えて新しい心理状態、あるいは過剰な状態を得ることを求めている。彼らが求めている感情に最も近いものが、陶酔状態であり、興奮状態がもたらす光に価値を見出す。ウィリアム・ブレイクと同じよう

*1928年8月の第23回アメリカンインディアン研究者国際会議の論文集（ニューヨーク、1930年出版）527-581ページ）

（訳者注）ベネディクトが南西部のインディアンと呼んでいるアメリカ・インディアンは、ここではズニ・プエブロ族をさしていると思われる。

にディオニソス型の人が信じるのは、過剰な道を進むと「英知の城」にたどり着くということである。アポロ型は、これらすべてを疑い、万が一このような経験をする兆しが見えたなら、このようなものを自分の意識ある人生から取り除く方法を見つける。彼らは「一つの法しか知らず、それはヘレニックなもの」で物事を計ることである。つまりローマ・ギリシアの法で、彼はいつも中庸を好み、知っている道しか歩まず、すべての破壊的な心理の状態においても冷静さを保つ。ニーチェがうまく表現した通り、たとえ踊りで興奮した状況でも、彼は「自分を失わず、破目はずすことはない」³⁾。

南西のプエブロ族はもちろんアポロ型で、アポロ型の価値観を踏襲していることは、他のすべてのアメリカの原住民とは対照的である。非常に限られた地域でありながら、しかもディオニソス型の文化が支配する真っ只中に居ながら、禁酒を守り、過剰を嫌い、エトスをもち、それによって危険な経験や挑戦的な状況を徹底的に避ける。乱交なしに繁殖し、エクスタシーを得るためではなく踊りに没頭するという宗教をもっている。そして彼らは拷問を決して行わない。誰かが死んだ時、その人の持ち物をすべて壊すなどということとはしない。周りの部族とは異なり、アルコールを作ったこともないし、買うこともない。そして麻薬にふけることもない。セックスさえもその神秘的な誘惑には陥らない。社会の秩序を乱すようなことは決してさせない。これらすべての特徴は、まわりの部族とあまりにも違っているため、このプエブロがどのようにしてまわりの文化から影響を受けずにこられたのかについては、説明が必要である。

このプエブロ族が他と異なる最も顕著な違いは、神がかった狂乱状態と幻視を禁止していることにある。現在、北米インディアン全体において宗教から得られる陶酔的な経験の価値は、その宗教構造の全体的な基盤となっている。陶酔状態は、何らかのアルコールや麻薬によって引き起こされるが、時には自分で引き起こすこともある。たとえば、絶食や拷問によることもあり、踊りによることもある。

まず、アルコールやドラッグによって引き起こされるエクスタシーについて考えてみる。隣のピマ族は、北部メキシコの原始文化を共有しているが、彼らにとってアルコールは宗教を映し出す鏡であり、宗教の高揚のシンボルであり、宗教においてははっきり見えてくるものと、かすんで見えないものが交わる形式をあらわしている。この部族の理論と実践は明らかにディオニソス型である。

「私は酔いしれて、聖なる歌を与えられた。」

「彼は赤い酒を私のなかに吹き込んだ。」

これらの歌のなかでよく現われるのはシャーマン的な経験である。彼らの儀式では「ティツイン」(tizwin)というお酒が飲まれる。これは巨大サボテンの実のジュースを発酵させたものである。儀式は宗教的形式にのっとり、しきたりの読み上げで始まる。しかしそこから得る徳

は陶酔することにある。求めている状態は興奮状態であり、極端な暴力は無気力さよりも好まれる。理想としては鈍感を突き破って、陶酔している人が完全なる興奮状態を得ることにある。これはもちろん、繁殖の形であり、健康を維持するための魔法でもあり、彼らの文化のディオニソス傾向と一致するものである。

メキシコから北では、酒よりも麻薬を宗教に用いるのが一般的である。北メキシコのペヨーテ（サボテン）あるいはメスカル豆はミシシッピの溪谷をたどってカナダの国境近くまで取り引きされ、いくつもの部族の宗教活動に用いられている。ペヨーテサボテンやメスカル豆は強烈な効果があり、現実離れた体験をもたらす。官能的な興奮はないが、鮮やかな色のイメージが現れることが多い。これを用いたカルトはウイネバゴ族⁴⁾において特に顕著であり、そのためペヨーテサボテンは超自然なものとされている。ある人によれば、「私の人生で知りうる限り最も聖なるもの」であり、また「この薬だけが聖なるもので、私からすべての悪を取り払った」⁵⁾とも言われている。ペヨーテサボテンは、トランス状態や非日常的感觉を得るためにあらゆる所で食べられていた。アラパホ族は夜通しの儀式でこれを食し、翌日中その効果は発揮された⁶⁾。ウイネバゴ族はペヨーテサボテンを4日間食べ続け、一睡もしなかったという話した。

ダツラ（*datura*）というのはもっと強烈な毒薬である。この飲み物を飲んだために死んだ男の子がいるということをセラノ族とカッヒーラ族から聞いたことがある。ルイセニョー族も同じ話をしている⁷⁾。ダツラは南カリフォルニアと北のヨクート族を含む部族によって、思春期の男の子の成人の儀式に使われていた。セラノ族の間では思春期の男の子がこの麻薬を飲み、それに打ち負かされ、昼夜を通して、そして翌日も昏睡状態となる。その間彼らは幻視体験をする。そして次の日に彼らは徒競争をする⁸⁾。ルイセニョー族も同じで、四晩の間トランス状態であることはやり過ぎであるという話を聞いた⁹⁾。ディエグエノ族は一晩だけ陶酔状態となる¹⁰⁾。モヘブ族はギャンブルで幸運をつかむためにダツラを飲んだ。そして4日間意識がなかったと言われる。そしてその間に夢のなかで力を得たと言われている¹¹⁾。

このようなアルコールや麻薬によって得られた興奮状態は、プエブロ族には何の価値ももたらさなかった。ピマ族はズニ・プエブロ族の最も近くに居住し、ズニ族から南西に位置し、簡単に行き来ができる。東プエブロ族が接触をもった平原インディアンの部族は、ペヨーテの習慣を重んじた人々たちである。そして西側の南カリフォルニアの部族は、この典型的なプエブロ文化の特徴をいくつか持ち合わせている。ペヨーテの習慣がプエブロ族に欠落しているのは、プエブロ族が何らかの乗り越えられない隔たりによって文化的に孤立しているからだとは言えない。またプエブロ族が、その近辺の部族と隣接して居住した時期がかなり長いということもわかっている。しかし、プエブロ族は興奮やトランスを得るために、酒や麻薬を使うことから自分たちを守ってきた。たとえそれらの麻薬のことをプエブロ族が知っていたとしても。プエブロ族にとってどのようなディオニソス効果も厭わしく感じられたと言えるだろう。そして、

もしプエブロ族に文化的な価値を与えたとしたら、アポロ的沈着さという点である。彼らは昔からアルコールを作ることをしなかったし、現在もそうである。インディアン保護地のなかで唯一白人のウイスキーの問題がないのは、南西インディアンだけである。1912年にズニ族の若者たちの間で酒を飲むのが流行りだした頃、プエブロ族の年長者がこの問題解決に立ち上がった。酒を飲むことが宗教的にタブーなのではない。もっと深いところに根本があり、酒を飲むことは気性に合わないのである。サボテンから作るペヨーテはタオ族にしかもたらされてはおらず、タオ族は色々な意味でプエブロ族の文化の周辺にある。

古代メキシコで使われていたように、ズニ族は¹²⁾、泥棒を捕らえるためにダツーラを使っていた。ステイブンソン夫人はその使用法を記録している¹³⁾。ステイブンソン夫人が記録しているダツーラの毒にあたった話やモハーヴィ族が2日から4日の間、恍惚状態であったことなどをあわせ読むと、ディオニソス的要素をアポロ的に組み替えた典型的なダツーラの用い方であることがわかる。ズニ族の間では、儀式を司る司祭が指定された男の口の中に麻薬を入れ、その司祭は隣の部屋に消え、ダツーラを飲んだ男が悪者の名前を言うのを待つ。その男が意識不明状態になってはいけなないので、歩くことと、寝ることを交互にさせる。翌日、彼は授けられた洞察力に関する記憶がなくなっている。その後、麻薬の痕跡が完全に取り除かれるように、彼は手当てを受ける。この男から麻薬の力を取り除くためには通常2つの方法が使われる。まず、吐薬を4回与えられ、麻薬の痕跡がまったく消えるまで吐かせる。その後、髪の毛をユッカ(yucca)の石鱈で洗う。その他のズニ族のダツーラの使用法はディオニソス的なものからさらにほど遠いものである。司祭たちが夜出かけて、祈り棒を植え、「雨が降るように鳥に歌うこと」をお願いする。そしてその時にダツーラの根を粉末化したものを微量、各司祭の目、耳、口に入れる。こうした状況では、麻薬の物理的状況は消えうせている。

北米では、アルコールや麻薬使用よりもさらに中心的なものは、自分で幻覚を引き起こすことを行なうカルトである。このカルトは西から東までほぼ全域にわたって存在するカルトであり、宗教的権力の源とされた。南西部は、このカルトの分布領域の最南端から外れたところにあるわけではないが、この独特のカルトが発展しなかった地域として、北米では際立っている。この幻覚の体験は北米ではかなりはっきりした特徴をもっている。つまり、この体験は特徴として一人である時におきる。幻覚を得ることができた者は、その幻覚を通して自分だけの神(マニトゥ、北米インディアン神)、あるいは守護霊を得ることができ、その霊は死ぬまでその人を守ってくれる。ロッキー山脈の西側にいる部族の間では、この霊を得られるのは特定の心的状態の人に限られるが、このような恵みは北米大陸のほとんどでは隔離や絶食によって得られ、大陸の中心部では、自傷によって得られる。幻覚から超自然の力が流れ出るのだが、それは非日常的なものやディオニソス的体験としてのみ解釈されるべきでもない。この幻視の体験は一つの形式を提供しているだけであり、それぞれの文化独特の価値が与えられる。そしてほとんどの文化においては、このような究極の体験はより大きな恵みを与えるとされている。

この幻覚に関する考え方が南西インディアンに欠落しているのは、周りに対する最大の文化的抵抗であり、周りとは違った文化的解釈なのである。このことは北米において南西インディアンの最も顕著な特徴である。そこには形式的なディオニソス要素がある。たとえば、危険な場所を求めること、鳥や動物との友情、断食、超自然的なものに出会うことによって特別な恵みが与えられるという考えはディオニソスの要素である。しかし、そこには恍惚状態でそうしたものを得たいという欲望はまったくない。ディオニソス的な要素とは違った解釈がされているのである。南西インディアンの村落においては、恐ろしい場所や、神聖な場所に夜出かけて声が聞こえてくるのを待つ。そういった行動は、超自然的なものとの対話をするのが目的ではなく、それによって吉凶を占うのである。このように夜、出かけることはかなり大変なことだと思われ、非常に怖い経験であり、これに結びつけられているタブーは、帰りに誰かに追いかけてられているような気配があったとしても、絶対に振り返ってはならないということである。このパフォーマンスは、幻覚を探しに行く行動に似たところがある。どちらも重要な事柄の準備段階として行われる。南西インディアンの場合、それは競走である場合が多い。そして競走の前の準備段階として、夜に出かけるが、それは夜の暗闇や孤立、そして動物が現れることをうまく利用している。しかしその意義はディオニソス的なものとは全く違っている。

自分で幻視を引き起こすのに最もよく使われるテクニックである断食も同様に、南西インディアンによって違った解釈がされている。それは意識下に埋もれている体験を掘り起こすために行われるのではない。南西インディアンにおいて断食は儀式のお清めとして必要なものである。プエブロ族にとっては、断食と高揚とは全く結びつけることができないものである。断食はすべての修行、そしてダンスや競走の準備段階に必要なものではあるが、断食をした後に力を得るなどというディオニソス的な要素はない。麻薬や幻視と同様に、断食もアポロ的要素に合うように解釈されている。

一方、拷問はほとんど排除されている。拷問はいくつかの病気を治すグループ¹⁴⁾の成人の儀式とダンスにとってのみ重要であり、これらの場合でも意識がなくなるという状態までにはいたらない。ズニ・プエブロ族は平原の原住民文化の自傷の習慣に接しており、ヨーロッパの習慣から派生したメキシコのペニテンティスの自傷の習慣にも接している。東方のプエブロ族はサンタフェ・ペニテンティス地域の真っ只中にあり、サンタフェ・ペニテンティスのメキシコ人は、東方プエブロのダンスや儀式に何の妨げもなく頻繁に参加している。メキシコ人たちの習慣はインディアンの習慣と重なる部分が多い。例えば、儀式が行なわれる建物での修行、兄弟の契りは、(アメリカ・インディアンにとっては僧侶の契り)、十字架を立てるといった習慣がそれにあたる。しかし、プエブロ族にとっては、サボテンのムチで自分を打つことと、グッド・フライデーの十字架に架けられることとは異質のものである。カリフォルニアあるいは平原の拷問の習慣は、プエブロ族の習慣に影響を与えることはなかった。プエブロ族の男の手は、どれも5本の指がそろっており、魔女として拷問されていない限り、傷はない。

プエブロ族がアルコールや麻薬によって得られるエクスタシー、または幻視という名のもとで得られる陶酔を受け入れなかったのと同様に、ダンスによって得られる陶酔も認めなかった。南西のプエブロ族ほどダンスをする人たちは、北米にはいないと思われるが、非日常的な経験を得るために最も直接的なテクニックとしてダンスを用いることは、プエブロ族にとっては異質なものである。プエブロ族のダンスは、ヌートゥカ族の熊踊りやクワキユートルの食人ダンスやゴースト・ダンス、そしてメキシコのくるくる回るダンスとは何の共通点もない。プエブロ族のダンスは単調で、繰り返しのみのものである。つまり以前にも引用したニーチェのことばを借りると、「自分を失わず、破目はずすことはない」のである。彼らの考え方はダンスで同じことを繰り返すことで、自分たちが影響を与えたいものに影響を及ぼすということである。

プエブロ族のダンスは、表面的には周囲のダンスと共通する点はあるが、特定のダンスの動きにはいくつかの顕著なディオニソス的意味の喪失がある。そのなかで代表的なのは、祭壇の上でのダンスである。北メキシコのクーラ族のくるくる回るダンスのクライマックスは、踊り手が恍惚状態に達して、普通ならば罰当たりと思われるような祭壇の上ののって踊ることである。その狂気状態で祭壇はバラバラになるまで壊される¹⁵⁾。これはプエブロ族にもある形式である。特にホピ族の儀式的ダンスのクライマックスでは祭壇の上で踊り、地面の絵を破壊する。しかし恍惚状態ではなく、プエブロ・ダンスの典型的な形式を構築するための原材料でしかない。その形式は最初に反対側から出てきた二つの‘側’の人たちが、ダンスのクライマックスにおいては一緒になるというのである。例えば、蛇踊りのなかの¹⁶⁾最初の(カモシカダンスグループによる)カモシカダンスでは、踊り手は踊ったり、しゃがんだりしながら祭壇を回り、退場する。(蛇踊りダンスグループによる)蛇ダンスでも同じことが繰り返される。二番目の場面ではカモシカは口に蔓をくわえ、成人になる人の前で踊り、口にくわえた蔓で彼らの膝をなでる。蛇はガラガラ蛇をくわえ、同じ動作をする。最後の場面で蛇とカモシカは一緒に登場し、祭壇の前で踊り、前と同じようにしゃがむ姿勢をとり、地面の絵を破壊する。踊りの順序はイギリスのフォークダンスであるモーリスダンスと同じように、決まっている。

南西インディアンにおいては恍惚状態は受け入れられていない。そして恍惚状態になるためのテクニックは、他の地域とは違った解釈をされているか、受け入れられていないことは明らかである。このことがもたらす結果は非常に大きい。つまり、それはシャーマニズムを排除することである。儀式を執り行うシャーマンにとって、このような恍惚の体験から得られる力は、北米の他の地域では非常に重要である。シャーマンのみが得られるお告げに頼っており、シャーマンの体験と指示を得ることがその部族にとって神聖な恵だと考えられているところではシャーマンの想像力の限界のみがその文化を変える限界となっている。ただシャーマンの想像力にはかなりの限界があると言える。なぜならシャーマンの影響を認めない文化よりも、シャーマンがいる文化の方がより革新的であるということは、これまでかつてあったことなどないか

らだ。しかし、これら二つの文化において個人がどこまで個性を発揮できるかという点においては、大きな違いがあることを無視してはいけない。一つの文化では一人のシャーマンだけが革新をもたらすことが許されてはいるが、もう一つの文化では¹⁷⁾、つまり南西インディアンの社会ではそういった人は疑惑の対象となり、結果として差別を受けることになる。南西インディアンのように型にはまった儀式においては、個人の即興的な行動を許す余地はなく、そのような行動をとる人がいれば魔女と見なされる。私が記録したズニの民話のひとつにズニの司祭が祈り棒を作り、それを外に持ち出し、捧げ物にしたという話がある。本来ならば、この行動は決まった時期にされなければならない。だが、人を治療するグループの一員が祈り棒を埋める正しい時期ではなかったため、人々は「司祭はなぜ祈り棒を埋めたのだろう。何かおまじないをしているに違いない」と言った。実際には、司祭は個人的な恨みを晴らすため、地震を起こそうとしていた。ズニの儀式のなかで祈り棒を埋めるのは、儀式的な行いのなかでも、かなり個人レベルであるにもかかわらず、こうしたことが言われるということは、もっと集団で行なわれる形式的な行動、例えば踊りや修行であれば、さらに厳しい受け止め方がなされるにちがいない。どんなに個人的な祈り、たとえばとうもろこしの粉をまぶして踊るといったものでも、それは日の出の時間そして、死んだ動物の上でなされねばならず、決まった時期、時間そして季節が設定されている。つまり、なぜあの人は祈っているのかなどと考えることはないのである。

そのため南西では、その部族の習慣や伝統に多大なる影響を与えるシャーマンがいる代わりに、特定の集団やカルト・グループの一員であることにより、そして必要なことを暗記することによって、儀式を執り行う人となり、司祭となる。グループの一員となるには、特定の血統と資金が必要である。重病になったり、蛇にかまれたり、また雷にうたれるといったことで、特定のグループの一員になることも考えられるが、そうしたことがなくても、一定の興味と資金があればだれでも人々を治療するグループの一員になることが可能となっている¹⁸⁾。ズニ社会で聖職グループの一員になるには、基本的にそれに合った家系に生まれていなければならない、治療グループの一員になるにはお金を払わねばならない。どちらのグループのメンバーも自己啓発によって超自然の力を持っているなどと主張することはない。ズニ社会で治療を施す人たちは、お金を払うことと、儀式の知識によってその治療グループの長となり、おまじない用のとうもろこしであるミリ（mili）を受け取る。

南西においてはディオニソス型のエクスタシーとそれにまつわる事柄が拒否されているのと同様、乱交も拒否されている。南西インディアンの宗教的儀式のなかで、多産につながる繁殖は重要な要素であることは確かで、通常、世界のどこでも繁殖といえはすぐに男女の交わりと結び付けられる。しかし、南西インディアンは¹⁹⁾繁殖を世界のあらゆるものと結びつける。ヘブリンの研究は、繁殖の効果をもたらすとされる儀式のタイプをうまくまとめている²⁰⁾。男の人がもつ円筒と女の人がもつ輪が儀式で使われ、それらは性器のシンボルとして、泉に投げ入

れられたり、地面に描かれた絵の上に投げられたりする。また女性のダンスでは、二人が男性の踊り手を装い、とうもろこしの皮を束ねたものに矢を射る。また、植物ユッカ (yucca) で作った輪をもった一列の女性たちが棒をもった一列の男たちと競走する。ペルーにもまったく同じような男女のレースがあり、男は裸で走り、女性を追い抜くごとに、その女性たちを犯した²¹⁾。この形式の意味は自明のことであり、世界中でみられるが、南西にはないものである。ズニでこのようなふしだらな行為が黙認されるのは、三つの状況に限る。一つは、寒さに対して特別な力をもっているトレウキー (Tlewekwe) 集団の修行の場である。この集団でまじないを用いるグループ (le etone) の女司祭は、特定の夜に愛人を受け入れ、その愛人一人ひとりから親指の長さのトルコ石を集め、それをまじないの飾り (mu etone) に取り付ける。ズニ社会でこの例は例外的で、この集団をきちんと研究するのはすでに不可能となっている。他の二つケースは、ふしだらなことを許すというより、若い人に必ず付き添いをつけるという厳しい習慣が甘くなったと言った方がいいのかもしれない。若い人の付き添いは、ウサギ狩の儀式と頭皮ダンスの夜に必要とされていた²²⁾。これらの日の夜に受精した子どもはとてつもなく強健であると言われている。ブンツェル博士によると、こういった日に男女はいっしょに踊るか、夜一緒にいることによって恋人になる機会が与えられる。ふしだらなことなど一切なく、快楽的要素もまったくない。性に対する好意的な寛大さがあり、「男の子だから仕方がないね」、といった対応である。繁殖のための通常のディオニソスの性行為からほど遠いものである。

アメリカの人々の間で一般的な過度に溺れるという行為は、繁殖とセックスに関するものだけではない。南西インディアンを直接囲む地域では、東には太陽の踊りの拷問に溺れるということがあり、西には喪に服す儀式で、破壊し尽すという行為がある。前述したように、南西では過度に拷問することもなく、拷問そのものがほとんど見られない。死者を恐れるために喪に服している間は重苦しいふんいきで、ハメをはずすということはない。南西においては、喪に服すことは不安になることと同じである。それはモハーヴィ族が大きな焚火で死者を焼き、悲しむ人たちの物や服を取り上げて献上するという荒々しい場面とは全く違っている。モハーヴィ族の荒々しい行動は²³⁾完全なディオニソス型で、カリフォルニアでもよく見られ、マイドゥ族の喪に服している人たちは、炎のなかに身を投じないように抑えねばならないほどである²⁴⁾。ポモ族の間では、炎のなかから死体の一部を見つけ、それにむしゃぶりつく²⁵⁾。

ディオニソスの儀式でアメリカ全土に広く分布している儀式が、南西インディアンにも定着している。それは頭皮ダンスである。これは平原インディアンの勝利のダンスであり、女性のダンスとも言われている。そのダンスでは、女性に最高の地位が与えられ、陣地を4周する渦巻ダンス、ぴったりした戦闘帽、頭皮の扱い方などは、平原インディアンと南西インディアンは同じである。すべてを忘れて踊り狂うというのは予想通り、南西インディアンの踊りにはないが、そのなかに数少ないディオニソスの要素がある。それは頭皮を洗って、噛むということである。骨や死体に触れることに対するズニ族の嫌悪感是非常に強く、歯の間に頭皮を挟むこ

とは、彼らに恐怖感を与える。このことからこの行為がディオニソス的であることがわかる。それに対して、ヘビ踊りでヘビを歯の間にはさむことは、そういった恐怖感を起こさない。踊りのなかで頭皮を持つ女性は非常に高い地位になるのだが、そのようなことができるように鍛えねばならず、どの女性もこの役割をやらせられるのではないか、という恐怖心をもっている。

恍惚や何かにおぼれることは、アメリカ全土にわたる特徴ではあるが、南西インディアンにとっては異質のものである。南西インディアンが基本的にアポロ的であることを示すために、彼らの文化のなかのいくつかの具体例をあげよう。

北米では汚物を儀式的に食べることに特に力点を置いている。そして同じカテゴリーに北西海岸のカニバリズム的行為も含まれる。しかし各地のカニバリズムにおいて肉を食べる儀式によって死者は称えられたりものしられたりするのだが、北西海岸では、こうしたことは強調されていない。クワキユートル族のカニバリズムのダンスは典型的なディオニソス的儀式である²⁶⁾。そのダンスはエクスタシーの状況をドラマ化したもので、踊り手はエクスタシーの頂点に達することによってやっと正常の生活に戻れる。どの儀式的な動きも平常ではない感覚を高めるためにすべて（意識的ではないかもしれないが）、計算されている。この儀式の前には長期の断食と孤立の期間があり、ダンスそのものは、しゃがんだりするダンスで、前もって用意された死体が女性の介助人によって踊り手に差し出され、踊り手はその死体を快楽的に取り扱う。儀式的に死体を噛むことによって非日常的なクライマックスが得られたと考えられ、そのあとには嘔吐と断食と孤立の長い期間が訪れる。

南西の汚物を食べる行為は、クワキユートルのカニバリズムの儀式と心理的には同じであるが、実際の行為は全く異なっている。儀式は恐怖を得るために使われているのではなく、緊張の心理的クライマックスとその発散をドラマ化しているのでもない。キャプテン・パークは、クーシングと伴に参加した時のネウイクウィ族の宴会の様子を記録している。そこでは集団のメンバーによってビンに入った尿が何ガロンも飲み干された。そこで描かれている状況は、クワキユートルの儀式と大きく異なっており、それはかたやサーカスの道化のおふざけ、かたや深刻な状況ほどの違いがある。その宴会の雰囲気は、下品な陽気さで、お互いに男たちが相手よりさらに上をいこうとする。「踊り手たちは大きなデカントを飲み干し、舌鼓をうって、大歓声の聴衆の前で、えも言われるほど美味しかったと言う。道化師たちはさらに興奮して、他の人たちよりもっと悪態をつこうとする。」²⁷⁾

南西インディアンが汚物を食べることにしても同様のことが当てはまるだけでなく、おどけについても同じことが一般的に言える。おどけに対するディオニソス的用法は、神聖な儀式を笑いで和ませることにあり、緊張感を緩ませることは、それに先立つ緊張と同じくらい深い意味をもっており、先に起こる緊張感を強調するものでもある。こうしたおどけの用法は、古代のアズテクの儀式から始まったと言われている。このような特徴をもったおどけを、私はプエブロ族には見たことがなく、そのようなものが存在するといった記述も知らない。おどける

ことは、ディオニソスの含意なしの単なる道化に過ぎないと考えることも可能である。私たちの文化におけるおどけがそうであるように。南西インディアンにおいて最も顕著なものが、このようなおどけた踊りであるが、これはまた社会風刺にも使われる。たとえば、支配者、教会、アメリカの代表者に対する風刺があり、また冗談を言い合うような仲の場合、こういったおどけをしたりする。そして公共の場で、自分の個人的なことを言う場合、ふざけながら言うこともある。

南西インディアンのアポロ的な要素を示す顕著なもう一つの例は、魔法の力の解釈の仕方にある。南西インディアンはヨーロッパの魔法の概念、つまりほうきに乗ることや、魔法の家の棚に並んでいる動物の皮や眼などを、そっくりそのまま取り入れているが、彼らは自分の世界に合わせて取り入れている。魔法に対する考え方を明確に記述しているのは、ドクター・パーソンが書いたイスリタ族に関する原稿である。イスリタ (Isleta) 族にとって魔法の力と善の力との違いは、魔法の力は一生続き、取り上げられることはないが、善の超自然の力は目的を果たすとなくなってしまうことである。イスリタ族はこれを実践しており、神聖なる授与が終了すると、その儀式に参加した人たちの神聖さが取り除かれてしまう。そして必要がなくなった神秘の力は、次の時までとって置かれる。彼らにとって神秘的なものほど気持ちが悪いものはない。最良の超自然な力でさえも、うす気味悪いものである。

南西インディアンが自殺を理解できないこともアポロ的な特徴だと思われる。ピマ族の話には、女のために自殺した男の話が多いし、平原インディアンは自殺を儀式的パターンに取り入れている。彼らは基本的に地位を上げるために自殺の誓いをした。しかし、プエブロ族に自殺の話させると、明らかにその概念を理解していないことがわかる²⁸⁾。私は話しや説明を通して何度も自殺の概念をプエブロ族に納得させようとしたが、いつも彼らには要領が得られないようだった。にもかかわらず、彼らの物語のなかには自殺の話がある。多くのズニ・プエブロ族の物語²⁹⁾には、男あるいは女の連れ合いが不倫をしている話や檀家の人たちがいうことを聞いてくれないという司祭の話がある。こうした人たちは、アパッチにメッセージを送る。鳥にメッセージを運ばせることが多いのだが、それはプエブロ族を攻撃させるためにアパッチを呼ぶためである。そして4日目になると、(南西インディアンにとっては4日目にならないと何も起きないことになっている。) 彼らは、儀式的に身体を清め、最上の服を着て、最初に殺されるために敵を出迎える。ズニ・プエブロ族に自殺について聞くと、だれもこれらの物語には触れない。たとえ同じ日にその話を聞き、自殺についてその質問をしても、多分彼らはこうした話を自殺としては考えてはいないのだろう。この行為は、儀式的なあだ討ちであり、ディオニソス的な行為である自分の命を捨てるということとは関係ないのである。

南西インディアンの文化的状況は、色々な意味で説明するのは困難である。南西インディアンを周りのインディアンから隔たせる障害物はないにもかかわらず、周りから切り離された彼らの文化的状況は、アメリカの他の部族には見られない。他の地域からの影響を探し出そうと

しているわれわれの必死の努力のなかで印象的なのは、他の文化の切れ端のようなものが途切れ途切れに見つかるのだが、全体のパターンに関するヒントは見つけることはできないことである。この論文の見解は、そのヒントが南西インディアンの基本的な心理のかたよりにあるということである。そしてその心理のかたよりは、地域の文化のなかで長年を経て、確立されたに違いなく、まわりの人たちから得たものの詳細を自分たちに合うように曲げることで、自分たちの好みを表す精密な文化のパターンを作り上げたのだろう。南西インディアンの文化を記述するのにこの心理のかたよりを理解することが必要なだけでなく、それがなければこの地域の文化的ダイナミズムを理解することはできないだろう。なぜなら典型的なアポロ的選択は、この文化を形成するために大きな役割りを果たしており、彼らは自分たちにとって好ましくないものを排除し、周りから得たものを改造し、自分たちの組織の発展のために、組織の細かいところにくいつものアポロ的要素を取り入れてきたのである。

注

- 1) (文化の研究におけるこの考えの理論的な枠組みについては、*American Anthropologist* というジャーナルに掲載予定の“Cultures and Psychological Types”参照。
- 2) 私はニーチェの定義に忠実に従っているわけではない。南西インディアンの問題に直接関係する部分だけ用いたに過ぎない。
- 3) ニーチェの『悲劇の誕生』68 ページより
- 4) ポール・ラディンによる「ウイネバゴ族」参照。アメリカ民族学、ワシントン事務局 371 回報告会による。1923 年出版、388～426 ページ
- 5) 前掲書 392、408 ページ
- 6) 「アラパホ族」A. L. クローバー、アメリカ自然史博物館の報告書 18 号、1907 年、ニューヨーク。398 ページ
- 7) A. L. クローバーの論文「カリフォルニア・インディアンに関するハンドブック」アメリカ民族学事務局報告書 78 号、669 ページ、ワシントン、1925 年出版
- 8) ベネディクトの論文「セラノ文化の簡単なスケッチ」*American Anthropologist* 26 巻 3 号、383 ページ、1924 年
- 9) A. L. クローバーの論文「カリフォルニア・インディアンに関するハンドブック」669 ページ
- 10) クローバーの前掲論文
- 11) クローバーの前掲論文 779 ページ
- 12) ウィリアム E・サフォードの論文“Narcotic Daturas of the Old and New World: an Account of Their Remarkable Properties and Their Remarkable Properties and Their Uses as Intoxicants and in Divination” *Smithsonian Institution Annual Report* 年次レポート、1920 年、ワシントン、1922 年、551 ページ
- 13) マチルダ・C・ステイブンスンの論文、“The Zuni Indians, Their Mythology, Esoteric Fraternities and Ceremonies” *American Ethnology*、ワシントン、1904 年、89 ページ
- 14) F. H. クーシングの論文“My Experience in Zuni” *Century Magazine*、3 巻 4 号、1888 年、31 ページ

- ジ及び M.C. スチーブンソンによる前掲論文 “The Zuni Indians” 503 ページの「みんな意義に溢れている」の一節参照
- 15) K. T. Preuss による書、*Die Nayarit-Expedition*、Leipzig 出版、1912 年、55 ページ
 - 16) H. R. Voth の論文、“Oraibi Summer Snake Ceremony”、*Field Columbian Museum*, Publication 83 巻、シカゴ、1902 年出版、299 ページ
 - 17) Paul Radin の書 *Primitive Man as Philosopher*、ニューヨーク、Appleton、1929 年、257～275 ページ、「ウイネバゴ族における個人主義の幅広い限界についての項」参照
 - 18) しかし例外として戦いのリーダーの一員になるには、誰かの頭の皮を剥がねばならない。
 - 19) H.K.Haeberlin の論文、“The Idea of Fertilization in the Culture of the Pueblo Indians” *Memoirs of the American Anthropological Association* III、No.1、(1916 年出版)
 - 20) 前掲書参照、特に 39 ページ以降参照
 - 21) P. J. Arriaga による書、*Expirpacion de la Idolatria del Peru*、リマで 1621 年に出版、39sq
 - 22) ブンツェル博士からの情報
 - 23) クローバーの論文 “Handbook of the Indians of California” 「カリフォルニアのインディアンに関するハンドブック」前掲書参照、750 ページ
 - 24) クローバー、前掲書参照、431 ページ
 - 25) クローバー、前掲書参照、253 ページ
 - 26) フランツ・ボアズの論文 “The Social Organization and Secret Societies of the Kwakiutl” 「クワキエートル族の社会構造と秘せられた社会」1895 年の『アメリカ国立博物館報告書』、ワシントン、1897 年、537 ページ以降
 - 27) ジョン・G・パークの「様々な国における宗教的、あるいは半宗教的な儀式における人間の尿と糞の使い方に関するノートとメモを編集したもの」ワシントン、1888 年、9 ページ
 - 28) Elsie Clews Parsons の論文 “A Zuni Detective” エルシー・クルー・パーソンズの論文「あるズニの調査官」、雑誌『マン』16 号、169 ページ、1916 年発行
 - 29) ルース・ベネディクトの原稿参照